



▲野菜を洗いながら品質をチェックする中務さん

自然の仕組みに逆らわない農業

出石地域には、より良い野菜作りをしようと有機農業に取り組んでいる一人の男性がいます。日々、試行錯誤し、努力を惜します取り組む姿。食の安全・安心は、今回紹介するような農業者に支えられていくのではないのでしょうか。

中務

喜紹さん（45歳）出石町口小野

納得のいく野菜作りを目指して

昨日、無農薬栽培を基本とする有機農業が注目を浴びています。

この有機農業に取り組む中務喜紹さんは、現在、約2haのアールの耕地に大根や聖護院カブ、白菜、麦などを栽培し、年間約13トンの生産量をあげています。

以前は、別の仕事をしていた中務さん。「家族が体調を崩す」という理由で、中務さんは、現在、約2haのアールの耕地に大根や聖護院カブ、白菜、麦などを栽培し、年間約13トンの生産量をあげています。

この有機農業に取り組む中務喜紹さんは、現在、約2haのアールの耕地に大根や聖護院カブ、白菜、麦などを栽培し、年間約13トンの生産量をあげています。

したことをきっかけに健康に気を遣うようになりました。自分で納得のいく野菜を作りたかったんです」と、文字通り畠違いの仕事を始めました。

自然環境と調和する有機農業

このような状況の中、中務さんは、厳しい品質基準をクリアするために生じるコストだわりよう。野菜作りにかけられる情熱がひしひしと伝わってきます。

といわれ、生産者も少なく有機野菜の価格は割高になつてきます。それにも関わらず、食に不安を抱く消費者は、有機食品（オーガニックフーズ）への需要を年々高めています。

厳しいチェック その目は野菜職人

有機農業は、遺伝子組換え技術を使用せず、堆肥などの有機質肥料によって地力を高め、病虫害に強い健康な作物を育てるため、化学肥料や農薬に頼りません。さらに適正な輪作（周期的に他品目を栽培すること）や多品目栽培、自然循環機能の増進などによって健康な作物の生育を図り、自然環境と調和した安全で味の良い農産物の生産が期待されています。

有機栽培された野菜は、多少の形崩れはあるものの、肥料によくな大地の恵みを受けて野菜本来の味を取り戻し、食せば私たちにさまざまな栄養を

高のほか、消費者に与える影響や輸入食品との競争など、多くの問題を抱えながら、日々、農作業に当たっています。



▲収穫した大根。今が旬



有機栽培された野菜には、このマークが付いています。



▲有機農業に取り組む中務さん。忙しい合間に縫って空いた時間の楽しみは、家族と一緒にスキー

中務さんが栽培した野菜は、京阪神へ出荷されるほか、市内のスーパーで販売されています。また、製粉して全粒粉として販売しています。

「いつかは、市全域の小学校の給食の材料が安全な地元の野菜になればいいですね。賄えるだけの収量があがるように頑張ります」と目標を持つ中務さんはこう言います。

還元してくれます。

中務さんが栽培した野菜は、

京阪神へ出荷されるほか、市

内のスーパーで販売されてい

ます。また、製粉して全粒粉

として販売しています。

「いつかは、市全域の小学校の給食の材料が安全な地元の野菜になればいいですね。

賄えるだけの収量があがるよ

うに頑張ります」と目標を持

つ中務さんはこう言います。

「健康は食から。子どもたち

が口にする食材が安全安心な

ものであってほしい」。

保育園に広報マンがやっこを!
12

竹野保育園

(竹野)

〈園児48人〉



環境省の日本渚百選と快水浴場百選に選定されている竹野保育園のすぐ近くにある竹野保育園。夏には園児たちも海水浴に行きました。

天気よし!!
今日ははどん
ど焼き



1月7日、同園で毎年恒例のどんど焼きが行われたので、その様子をのぞいてみました。

輪になつて
今年の抱負
うを発表しよ

先生がお正月



縁起物のミカン
焼いてみるとどんな味?



のいわれを説明しました。
「お正月にお迎えした神様をお送りする日本の伝統的な行事です」。

今年の抱負を書いた紙を手にした園児たちが園庭に集まると、園長先生がどんど焼きを作り、それを園児たちが輪になつて囲みました。

一人ずつ順番に「風邪をひかないように」



ワラに火がつくと園児たちは一人ずつ順番に「風邪をひかないように」



「友達と仲良くできますようになどの願い事を発表し、紙を火の中へ入れていきました。

どこまで舞い上がる!?



たちは、青空に向かって舞い上がる紙をいつまでも見送っていました。

地区文化祭に、演劇好きかけは、三江

足し、30周年を迎えました。活動のきつ

書き初めなどが火によつて高く

舞い上がる手になると

舞い上がる紙を手になると

舞い上がる紙を手になると

ます。園児

たちは、青

空に向かって舞い上がる紙を

いつまでも見送っていました。

たちは、青

空に向かって舞い上がる紙を

いつまでも見送っていました。

たちは、青

笑の演研サークル『ねこ柳の会』(豊岡)

涙誘う人情時代劇

演研サークル『ねこ柳の会』は、人情味溢れるオリジナル

時代劇を披露する市民演劇

サークルで、市内を中心に、現在14人のメンバーで活動しています。昭和53年11月に発

足し、30周年を迎えました。

地区文化祭に、演劇好きかけは、三江

足し、30周年を迎えました。

活動のきつ

書き初めなどが火によつて高く

舞い上がる手になると

たちは、青空に向かって舞い上がる紙を

いつまでも見送っていました。

たちは、青空に向かって舞い上がる紙を

いつまでも見送っていました。

たちは、青空に向かって舞い上がる紙を

いつまでも見送っていました。

たちは、青空に向かって舞い上がる紙を



▲30周年記念公演で「瞼の母」を演じた劇団メンバー

披露し、豊岡初の本格的劇団の旗揚げとなりました。

代表の鳴海芳一さん(小田井町)は「自分にはないもの

声に応え、市内の人

内の老人

ホームでも

した」としみじみ振り返ります。

「一度だけでも公演しても、変好評で、これが大変好評で、これが大

い」と。これで、この

度もつた

い」と。この度もつた

い」と。この度もつた

「一度だけでも公演しても、変好評で、これが大

い」と。これで、この

度もつた

い」と。この度もつた

い」と。この度もつた